[illegible]

二十二

歌を名とせり

[v.37]

PL788
.4
.G4
1654
vol.37
Asian
Japan
Case

2004551392

42

源氏四十九才春より秋までのうちを兼二才　柏ノ事

故権大納言のもちあくうきぬひにしかるしさ源
あらずロおしきものに意志のひぬふ人おほかり
六条院にも大かたにつけてぞにようにめやすき人の
なくなりをばおしこ給れこころに、ましてこれも
朝夕にしたしく来りなれつゝ人よりもれこころ
とゞめおぼしたりしかばいかにぞやおぼし出
ことはありながら、あもれはおほくおりくにつけて
思ひぬふ。柏ノ一周忌之れもてにも。鋪理などとりつきをさせ給
よろづもしらずがほに。兼ノいもけなきれ有様をこぬふ
にも、さすがにいとじくあもれなれば、れ心のうちに
まる心ざしぬて、こが〇百夜をなんべちにをさせ

縁けるおとこはいふこゝろもましてぞうしてまうすにおよび
男しさをなふ大ねの恵もなくなくもなくなふ
とりもちて念仏まいらせ縁りし一条の家どもこの
ほどの内心ざしかくとかへひ男縁こくの恵道
よりもまさりける心の程をいとゞくいせひ男ざりき
とゞおとゞうへもよろこひ男縁あまさ給ひりし世の
恵しきもくもれしうまひけれども[illegible]あり。
いらじゆるしきうの[illegible]おぼしこがすつき
をず山のきうどいこの[illegible]やもうくひとつきもれ
あるやうまておなじみなかありべ人の家も此世の人
めしきうれはけまれなひめれども[illegible]

あらずおぼえられど。すべてこの世をおぼしなや
まじと思ひ給。此(女三ノ)をこなひの程にもおなじこゝろ給
こそは川とめのふしめなど。おぼしやすて。かく家
さ海になりのひて後は。ちかなさことにつけても
こゝろ寄せ給。此寺(仁和寺)のうちもしらさまやしに。
ゆきいでこゝろ無うなん。そのまゝりの山にはれうさゝろ
などの山里につけてはおもれなれば。なれのふとて
此ふこゝ海やうなるもしに。去(久ノ河)の空山霞も無ど
こゝしれど。こゝろざしふくはりむさまて給る。
しらしぐらりになん

世(末)をまゝれへなん後はをくらともおなじ。所給

志もたづ○よいとうたきわざになんあるとこそ
のへるを洞(女三ノ)ぐらてこ給ほどに(涼)おとゞのきこしたり
のへり。れいならず。れまへちうきらいしどもを(河)お
ぞあやしと(涼ノ)れんずるに。院(朱)のれふこなりけり。
こゝまへいとあれなり。(多河)ふかあすかれこゝち
すゝを。對面のうちにかれもぬことなど。こまやかに
うせのへり。これ(涼ん)おなじところのれともなひを。
ことにおしきつしもなきひぢりごとになれど。
げにさぞおぼすらんかし。けれさへなろか(なり)女さ夜に
こしまりて。いとゞうちろめたきれちひのそしふべ多
かをいとくかしとおぼす。れ(女三ノ)返(ふり)けくましげり

出なひて、れいかひにはおほにびのあや一うきれ
なふ、かきかへなへりけるかとの、れ事のそぞより
ほのこゆるを、さりてこゝまへぞ、れまはいとをゝ
なげにて

女三 うき世にはあらぬところのゆしくてそむく
山路(ぢ)にさひこそいれ、うしろめたげなるれいしき
なるにこ(源河)のあらぬ所もとめなへるいとうとてこゝろ
うしと笑しなふ。女三ノ今はまほにもこしなりこ両は、
いとうけくしうらうたげなる、れひたいがこつら
つきれおしさ、なぬぐちごのやうりこえなて、
いとじうらうたきを、源ノこなりなふにつけてはおど

かうは女らしこそとうつろえぬべくおぼさるれど
れ本丁ぢらり備てまていとこまなうけどとくうと
うとしうはおしぬ程まそなしこえしてぞおりし
けうはぬ君はめれらけ許まねてまへりけうたささて
ちひ出おのてれ袖どひきまつれ生り給ふ御いと
うけらしあうきう寸まれまうしのこきんの紅梅乃
れぞのすそいとあざくあざけなるひきやられて。
れ身もいとおしいまそうきろの限りさなし
まへうさ御はれいのことなれどいとらうらげなる
あろくそびやかなる柳をたづりてけらしきさん
やうなりうしこえ春華ましてぞこときこまつる

どりたん心ちして、ぐちつきうつくしうにほひ
まこのびらかに、もづしうかほりたるなどは、なほ
いとよく（柏に似たるとえ）せひ出たるれど、かけもいとうやうり、
きはこなれたるさまにはなりしものは、いとで
うらん、（女三）やにもにはあらず、今よりけさうくもれく
しう、さ面ことにこしのへるやしきなどは、（係）我れ、
ぐこのかげりも、にげなりしずこなされたまふ、
まづまあ面こなどしのつほどなるも、これたうう
なれらいしに、何ともしらず立よりて、いとあいた
しうとりちらして、くひかなぐりなどしのへも
（係詞）あならうがりしや、いとふびんなり、かれとりかくを、

うひまれは先とじめぬめし。まれいひさだめすき

女房もさそいひあはせひのふ。うきいづき（基女）

のひて。それ（源氏）衣（基）のまことのつと気色あられ。ちいさ紙

ほどなれちいさき紙。おまゐらせをばやおもしん。とりかへりの

猶にさいつらけ給へ袖とのえかし也。今よりいとど（基ノ色めきたる所あると之）

けりひとあるこそわづらひけれ。女家もしし（昭君堂ノ女子達ノ事）

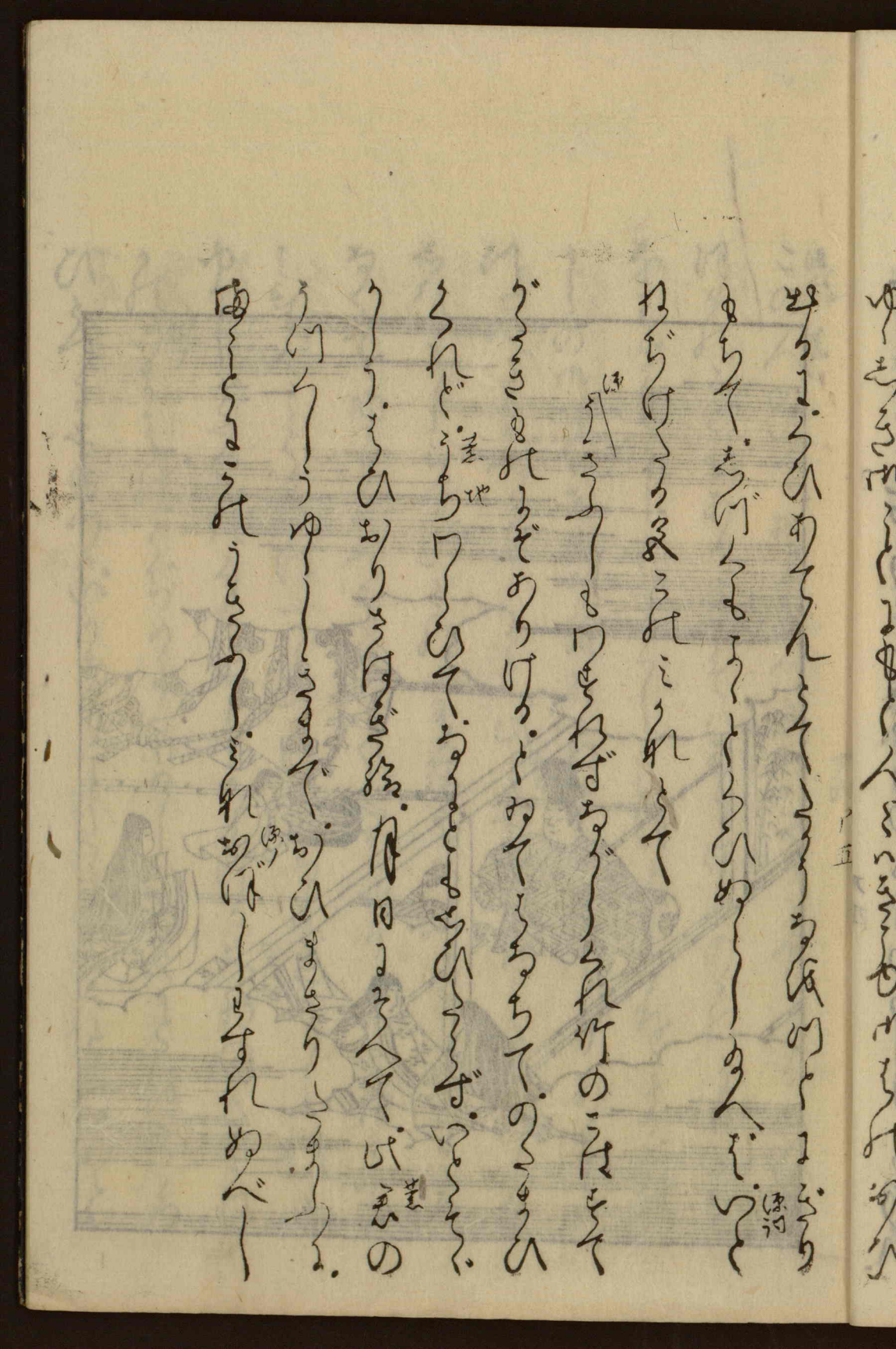
なふめるおもはる。うるへ（基）おい出そ。こころずらへさ

うし。随（さ）くあはるもまれんし。哀それをのくの

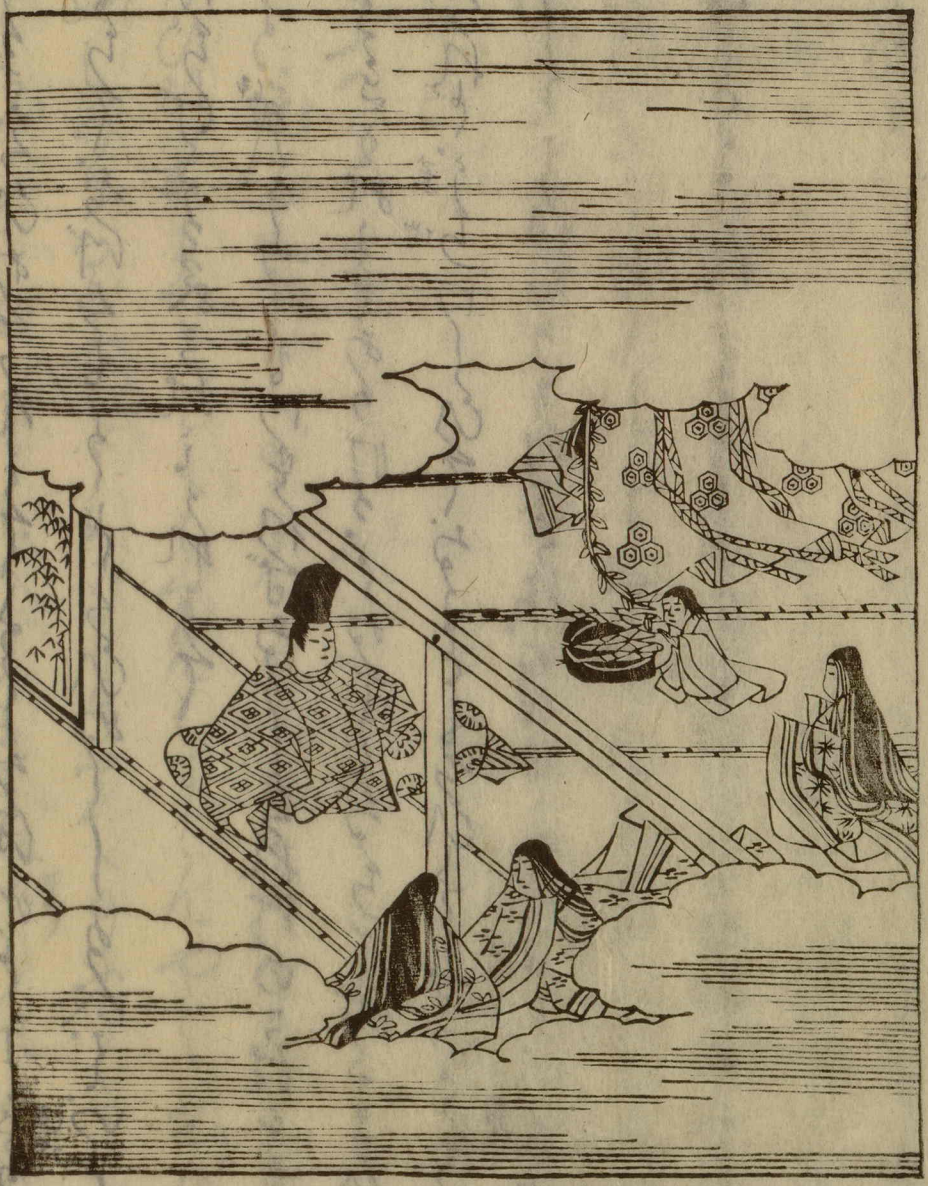
おひり末までにこももてんとすへんやこ。武蔵乃

盛（さかり）しおりなむどく。うちまま景しなふうとて

ゆきてそれとはもし。人ぐいこちも。それ（基ノ）まれ詞人



出るまゝ、くひあてんとて、こゝろあ浪川とまぶり
もちて、志げくもよくとくひぬしまんぞ、いと
ねぢけたる女これこれとて
（源）さゝしもつもれぞあがしくれ竹のこはもて
がてきもれるぞありける、とぬてもちて、のこまひ
くれど、（美）うちつしひて、おまともせひたゞず、いとそゞ
りしう、さひおりさはぎ給、月日まそへて、此（美）の
うけくしうゆしさまで、おひまさりたまふる、
雨とまこれうきつし、これ（源）あげしますれぬべし



この人(源ム)のいで抱しのべきちぎりにて、さらせひの
ほかれこともあるにそはありけめ、のがれがたりな
ほうぎぞりしと、すこしはおぼしなをさらこゝぶ
うしのれすくをもなほあるゝことおほうり、あまた
けどへたまへる中にも、此(女三)こやこそはからほなる
せひまじらず、ひとれれ事程もせつまあるゝところ
なくて抱しのべき後、うくせしざりしき夜にて
こまかことおぼすまつけてなん、色にし川こ
ゆかしがらく、れくちおしかりけり、大(タム)ねのきこは、
かれいまれ(柏ノ)とぢめにぞめしひとこと後、こゝろ
ひとつにせつ、いかなりしことぞとは、いと

男まほしう浮れしことも床しう候はの心えて。
さひしきこともあれば、中くうち出てみえんも。
るはつかしうていりなんつゐでは、ひとつの
うけしきあり夜もあさましき文られ人のおもひへ
えりし夜とも、こうしめさんとせつかり給、哉の
夕のまれあまりは、一条の家をさへやもこそて
あひてげにりのへりうち、とけしめやかなり琴
どもあるどひきあはする程あるべし、おくもえとり
やらでやがてそれこそ、このひきしはいれなり
かへりこしつるあまりつゝ人のおざりへつけつゝひ
ごともとまくさめのねざとあへもまうちのおもひ

うつぶしくぞろまくき程なり。例のこやせどころ
對面しまひて。むかしの抽絵どもこそこそかたし
なふ。けがれとおくあけくれ人をげく。抽きはがしく。
おきなき先達など。すぐさあまて絵にならひのひ
ていと靜にもれあまれなり。うちあれたる心ちすれど。
あてにけさうくすゑなしまひて。前載の茵ども。
むしの口をげき咲べとこぐれたるゆふぐんを。
うつし絵。和琴をひきよせたまへれば。つまちに
をしべられていとうくひきなしたる。ひとがに
をしてなつかしうおぼゆ。やうなるあたりなり。
をひのまくなるすきごろあるへを。をげむるゝと

なくて、さ海わしきけそひをもあらはしさりまじき
名をもとつかぞうしなど、ふつゞけつゝかきなし
なふ。右志（柏）のつゝまひきまひしことなりけり。おしき
まひとつなど、すくしひきまひて、衣（夕詞）ひとめぐらか
なるゝまゝ（柏ノ）かきなしまひしまや。これ（後案ノ理ニテモ柏ノ事ニ）れことま
もこまりて（こまんとえ）侍らんかしうけ給りあらはして
しがれとのたまへば（古見不詞）とのをえてよし後より、昔のれ
ましはあそびの名称をだに。おもひ（後案ノ）出給ひずなん。
まて侍めり。院（朱）のお前まて、女宮たちのとりぐの
れことぞ、こゝろゝきてしたまひしまも、かやうの
かたはおぼめしうしぞ抱しまつとなん。さざめ

男結めりしきおしぬき海りほれぐしう　ア"
数ておずめずくしのふめればせのうきけりまよとく
いつやうはおん。えねふぶとくきえくしくまんだいうら　夕詞
ことりのれせひあうや。かぶりぶはおりとうち
あずめてふといせうしやうまかへればうれあそうしば。　浜息不詞
こゑうはつるはうくとまやとくまくたらうあう　夕ニ引続ヘ之
さをかへまれむつしうせうふかへしげめうくをせ
ずふおくしめ須くんとくくし結おなさおうけてう　夕詞
あうれをいくるこそ須しめされをそうけう海　落葉ノ終り
うくんとう空つれとそ。こ寺のまくちくせしうを　終りと
かへど。ざくこうしまうけひそくまうふずすくと　落葉ノ地

なれば、志(タノ)ぬてもきえて給りず。月(ビ)さし出てくもるを
なき元にまゐ○うちかけす屋が○もつゝをたゞなれぬ。
うしやましく罕ぬふしんかし。風のたゝさむく。
もれあそれなるに。さそたれて。さうの(茲葉ノ)ことをいと
ほのゝにかきなしぬへるを。おくふかきこゝ
なるに。いとゞ(タム)うろとまりたてゝ。なかくりも
おもほゆれは。琵琶(びハ)をとりよせて。いとなつしき
れに。想夫(さうぶ)恋(れん)をひきぬふ。詞(詞)もひをとびがれなるは
うるたしいとかれど。これはことゝりをぬふべくや
とてぞちるすれうちをそゞのしきてぬへど。
ましてつゝかしきさしいとへなれば。家(茲葉ん)はくゞ抽の

のこおそれくおぼしつゞけけるに
夕ぐれ出ていつもいつもあはれとは人に
もぢうらしきまでこそ思ひなつまゞすゑ
つゆをいつくしひ給
かきはのあはれなりへくうけどく
おりはなのやいのひけりおぼしおはどる
さりおほとりあまのねがゝふかきき人のこゝろ
ちあてひさつへうかおもじきくべの袖といへど
哀ころすぐるものぐさりしせうさきこうして
やこのひぬれバうしめしなゆかでおぼゆれどもす
さずさし一さ紙さ歯ぐまひさ出てもゆかんぞ

られぬるかれ。秋の夜かりし侍らんも。笠うし志
柏ノ
とぶめやとけぶりてなん。まうで侍ぬべう見侍。
まることさしは心してなんさかしかべき法。この
小ことばのさしべかへぎ。まことせこ夜をんや。ひき
夜がふ事ことも侍ぬべきよなれば。うしろめたくこそ
など。まほにはあしほどうちにほをし。無て出給。
比
こゝひのれすきには。人ゆるしきこし。別べくなん
ありけり。そこもうとなきいうしへがたりのこ
まぎしいさをなて。武のをまをん心ちもし侍しぬ。
侍りおほくなんとて。れ（伊良石ノ）をくり物に笛をそへてなれ
給是（伊）になんまことにかるきこともつるもうべく。

始是にあるんまことにふるさこともつるにうるべく。

ア十

ゆきをき侍りしを、かし子よりもさふにうげもなくも
あられにこゆふるを、此さ記にきをもんこゑるん。
よそあるがしもいぶかしく侍りとさそしさまんぞ。
夕詞
まけかもしかしぬ隠ず(ゴ)にそ侍べかれとて、こ
ぬふにこれもげにまことにもに柏ノ(ノ)にそへてもて
あそびつゝげかしもさしにこれがねのかざりに
えふさとをさず。しもんひとにいでつゝへてし
がなとおりくさそしごちぬひしをしひ出給に。
今すこしあられおほくそひて心にふさなくす。
ぢんしき調(ぢう)のあるしぢうりふささしてむかしを
志のぶ独(ひとり)ごとは、さてもつこゆるされ侍りこれも

まばゆくなんとて出給ふ

以具不 家しげきむぐらのやどにいましへの秋に

かはらぬ虫のこゑかれどきこえいぐしうまへり

タ よこ笛のしらべはとまりぬをむなしく

成しねこそつきをまいでがてにやすらひ給ふ

夜もいたく更にけり 雲タリ にうへりぬへれむかうし

おどおろさせてこれはなひにけり 比 これ家に心がけ

罪なくてかくねんどろがりきこえしぬふぞおとゝへの

きこえしきこせなれバかやうに夜ふかし給もなほ

よくて 人タリ のふ紙も 雲カノ きくくねたるやうなりて

かしぬふなるべしいまと紙とつかされ山のと

声ハいとおしうてひとりごちうたひて、こは
なぞうくさしうためたる。おなじもれや今夜乃
月をこぬ里もありけりとうめき給。かうしあげ
さきぬ。こゝすま記あげなどしなて、むしちく
ゝしぬへりかゝる夕詞夜の月にこゝろやすくゆめこる
人もあるもれかすうしいでぬへ。おなこゝろうなど
罵しぬへど。心やましう打ちひてきくまひぬふ。
云ぬん
右ぶちのいまけなくねをびれたるけひなど。そ
うしこまうちして。女房もさしこゝてふしたる。
ひとげもまざけくしきに。ありつるさゝろのみさ夜
夕ん
落葉
ちひあもするに。おほくかりたりこの笛をうち

かきのひつゝいかゝ名所もおぼめくまゝかゝん此こ
とゞもはしらべかもしずあそびのかゝんかし家
もどころも和琴のごゝ手ぞうしなどもひやりて
かしのへりいかなれば右君(二拍)のこゝろおほゆるのこゝろ
おんいやんごとなくもてなしきこしなどしいと
かゝきかしきなりかんとそれにつけてもいと
いぶかしうおほゆるをとりもんことこそいとく
おしかるべかれ大かるの世につけてもかぎりなく
きこゝとかなしずさぞあらうしなどもかゝ。まづれ(タトヒ雲ゐ)
中のうちかしきばしこゝろもひやりもなくてむつび
こゝろ年月の程をかぞふるにおもれにいと

かうをしたちてどうりなしひゆへるもことわりに
きくゆひきりすうし（比）孫入ゆへる夏にかれ（柏）来つかに
たゞありしさ夜のうちさすがたにてかたはし
よわてこれふえをとりてうち（夕ん）夢のうちにも
おきさ人（柏）のまづらりしうこのこゑをたづねてき
たりとせふに

（柏）笛竹のふきうる風のことなしは東のよながき
ねまつたへなん（柏ノ行）せふかたことに侍りきといふ後
（夕ん）ととんとせふ程に若君の○をびれてなきゆふ
此声にさめゆひぬ

この君いくゝなるきなりて、つぐこゝなどしなへば、
めれともおきさはぎ、うへもおほとなしぶら
ちくさりよせさせなひて、こしもさゝしそ
そくりつくろひて、いざさてなるまゝ屋里、
いとよくこえて、つぶくとおしげなるむねを
あけて、ちなどくゝめ給、ちぞもいとうけくうおい
すり君なれば、志ろくおしげなるに、れちもいと
うもしうなるを、心をやりてなぐさめ給、をとこ君も
よりおりして、いかなるぞなどのなふうちまさし
ちしなどして、こぐりがもしきり、ゆめのあ
もれもまぎれぬべし、なやましげにこそこゝ西れ

いまめりしきれ（夜薬ノ事）の様のほどにあくがれ（イノ）たまふて
夜ふかき月めでたりかうしもあげられ
これがれいのもれくけのへたるなりなどいと
ひくおしさうかしてうちなへば打（タ）もしひて
（詞）おやしのもれくけのさるべやまろうしあげずは
ミちなくてげまえいりこざしまし。なまたの人の
おやに成なふまくに。さいたりふくもれなとそ
のたまひなりにこれとてうちこやまなへるまこの
いとそづしげなれば（書力）さすがにもれものこ後もで
いでなひ（詞タそなたへと云々）ミぐるしとて。おきしかなる時かげを
さすがにもぢなへるさ後もまくかくず。（地）まくとに

このきこゝなづゝてあるきむつりあるしなひ川
大和の君も夏おぼし出るまこのふえのまづゝ
りしもあるかれ人のころとゞめて夏へ出し
ものゝゆくべきくまもあらず女の仇川人もう
ひあるきをやいつゞしひつゝん。この世までかぎま
しひいれぬこともかれいまはのとぢめに一念出
うゝめしきまもましハ衣ともしふまつりれて
こそハおながきこれ園まもまどふまざあられかれ
ぞこそハ河ぐすまもしうハとゞめじとしふよあれ
あどおぼしつゞけてをこゝざま誦經をきを給又かれ
拍
れのよをれちまもをさせなて此ふえをバ口ぎと人のさう

ゆへふかきもれまてひき出なへりしを、こちまちは
仏の為にせひかんも、こうときことくはいひながら
おへなかるべしとせひて、六条院にまゐりのひぬ
女(唱ノ)れのれすにおいしますほどなりけり、三の家(白ノ文ノ字)三
ぞうりまて、なかにうけくしくおもすりを、こあるに(悲ノ字)
まぞまるとりけきておいしまさを給ひる、(白ノ)もじめて
出ぬて、(訶タ)おねこそ、(白ノ様との給ふへ)こうやいぐきなりて、(唱ノ名め法一とこへ)おちるへ、おて
おもをとしこづくうしこまりて、いとしどけなげに
のこまへ、(タ)がうちけしひて、(訶)おもしまをいりてこと
すれまへをはけたり給へん、いとき(輕ニかかぐしきん)やうくなるん
とて、いぐきなりてねこまへれば、(白訶)へもこぞ、まろが

かゝいかくさん。なほくとて。此(白)軸してさし
かくしたまへば。いとうつくしうてなてなりなふ。
こなたにも二の家の門(慧)をひとつにまじつきて
遊(あそ)びなふ候。うつくしうそなりますなりなり
すきのまれほどにおろしなりなふを。二家こうけ
なひて。まろもちね(タ)にいざかれんとのなふを。三(白)の家
あがちね(河タ)をやとてひかへなへり。院(涼)も此しんじて。
いとこぶりがはしき此者さ夜ぞもかれ。おほやけの
此ちかきまもり(タノヲ)をつくしの経(ずいじん)にまやうぞんと
おしそひなつに。三(白)家にそいとさぶなくおもすれ。
つゐにこのうそにきとひ申給と。いさめきそしあつ

ひ給。夕ねもけしひて二河家ハこまなくこのうえ心に
こころさり望しなふ。此こころふくなんおいしまは
めり。此こしの程よりも。おそろしきまでこしさを
給なぐきそしなふ。深うち思ひて。いづれをもいとうろ
ろしと思ひしさをこまへり。二河ぐらしきうろぐ
しき公卿の此座なり。おなしまそとてけたり給
りんとするに。こやこちまつりて。さしかりもなれ
給いず。深ふこやの萬君ハこやこちの此つらにはあり
こうじきぞうしと。此こころのうちにおぼをどおなり
なるその此心ぞ人をもたゞ。廿三こやの此こころの鬼にや。
ちひよを給へんと。これも心のくせにいとおしう

おぼさるれば、いとらうたきものにしひかしげき
きたる絵、大ねにこの（羔）志をまぐえよくこねうると
おぼして、三寸のひまよりさし出たまへるに、羔の
枝のうれて落たるをさりて、三をなりてまゐきた夜
へば、（羔ノ）もしなおもしたり、ふるあねのなをし志
かぎりをきて、いとじうしろうひかりうつくしき
こと、こゝろちよりもこまかにおかしげりて、つぶ
つぶときたりなり、な夜めとまる心をそひてこれど
まやまゐまゐなど、これは今すこしつうかぎあり
き夜ようこれど、まじ里のとぢめおかしうは
わかりしきなど、いとらく（柏ニ作ちとへ）おぼしぬへり、くちけきれ

ことさしは。芍やうなる面してうち思ひこうなど。
ワがめれうちつけぬるやあらん。おとゞもうなるぞ
おぼしよすらんといふくめ事を床し。安うちへ
ちひなしこそけるかけれ。よれつねのうけくしき
ちごどもとそしめふこの君(恵)はいとあてなる物うし。
面ことはおしげなるを。こくらべなりつゝいで
表もしうるゞふゆへもまことなるべちしおとゞ乃
さばかりよるいとじうちひほれのひてこと(柏ノ子とこ)ゑのり
いでくるひとぐるなきことゝくるこそうぐりの
女術とぐるとゞめよりしとなきうぐれたまふる。
きうをなしさらん。つゝえがましさるゞちふもいで

いでさはあるべきことぞとお紙こころえばせひ
よろしくなし。心ぞんさんなつしうおもれまて
むつれおそびぬんぞいとらうたくおぼゆ。源ぬいん
けうりのひぬれバのどやかなれ抽紙などさしてて
おもする程に日も暮かりぬ。夕詞べ 和ア れ一条 蔵家に
まうでたりしに。おりをしる程など罵出ぬんる紙。
源ノ 御ゝ思ひてきくおりす。衰なるむかしのことかり
たるかしぐもおんさんなどしかりかれ 詞
起まぶれん 恵の心ぞんはげにいかしへのたしまもひき
出けべかりけるなりなぐし。女はな紙人の心うける
ぞうりのゆへよしともおぼろけにてもなすまじう

こそありけれとおもひしらることぐもこそおほ
れ色(柏ノ字)まし事のころぞしをますれ(タリ)ぞかくなげき
ようハを人ましられぬとなしがおなじうハころ
ぞまろてどくかつひゆかしげなきこぐれ
なりしんやさぐらめもころまくらめやすりんぐき
ことなりんとなん。ふかとのかへバさりし(クん)人のうへ
のれ(源ノ)をしへぐりをころづけまてかりすき
もいでやとこまり給(タ詞)なまのこぐれ。なんなん。なん
つゆなしめ世(柏ノ字ヲ如シ)の哀をうけそめ給ましあらはし
ころこぐかく給ん。こそなかくよれ川ゆ乃
なんぎありかかは給しめとてこそさうぶれんい

心とさしすぎてゝといで給ひんやうくゝとは
給ふまし。もれゝついでゝりほのゝなりしを。おり
かゝのりしづきて。おかしうなん給しなまごとも人に
よりことはしたゝがふ。まざまこそ給べなれ。よもひ
などもやうくいたうワろびなつべきほどゝりを
抱し給ひず。まゝあざれがましく。すきぐしき
かしきなどは抱なれなどもし給しぬ。うちとけ
なつかしやしたゝなつしうめやすき人の此宿徳に
なん抱しなひけるなど。宮し給ふ。いとらきつゐで
けゝり出て。すこしちゝく来りよりなひて。かれゆめ
がたりをきゝこまへだ。とゝまれもの給ひで

きこしめして、おぼし（河）あはすることゝもありその
苗ハこゝまこゝらべきゆへあるもれなれ、それハ陽成（やうぜい）
院のけ、ふえなり、それを桃園を負俗歌にまゝなぐへたり 武の宮のいこじさ
もれましめひけるを、それ柏 悲哀も、まらもたより
いとことなる○紙ふさいでしまんじて、皮宮（桃園）の
荘のえんをしれけり日をくり抱きとせぬへるや、
女のこゝろハふくもこゝろしらず、しうもれし
こゝろなつきなどのかひて、ず（添ん）志の世のつゝん（絶ノ）ハまさ
いづるまとうはおもひまぐへん、さやうりおもひ（蓋へ作さへんとのす）
なりそんしなどおぼしてこの志（タ）もいとゝいたり
ふるさへなれバ、そひよることあらんかしとおぼす

ゆきんなれば、しひよりことあらんかしとおぼを

その(タム)れ氣色をみるに、いとゞはしかりて、とゝまりも
うち出ていて給ひ○ど、をめて(源ニ)さらをまゐんのころ
あれば、いましもことのつゐでなり、おもひいでこそ
やうにおぼめしうもてなして、いまもち(夕内 柏ノ)とをし
ほどに、とゝしひにまゐりて侍しに、なりん(柏ノ)後志
ことゞもいひ、並侍しなるに、しかくなんかく
かしこまり戸よしを、思ふ抱し侍しかば、いかなる
ことにか侍りけん、いまにそのゆへをなんえおもひ
ゐへより侍しに○ば、おぼつかなく侍しに、いと角ぐく
しげにきてゐるに、(源ム)されば、よとおぼをどおるにハ
そのほどのことおしうしのまゐべきなるに○ば、しぶし

おぼめしくて志(詞)か人(拍)のうしゝとまるだろうとの
氣色(源ノ)はおるのついでよりもりおかんと、ふげりしも
えさひおどおん、さていまさげりよ、かれ夏はせひ
おはさてあん、男ゆべき、おろうしずとか、女房志
つゝへにいつゝとおりとのうまひて、おさくれ
いつゝもなければ、うち(タノ)いでさしてげりせ、いり
よおぼしよりとつくましくおぼしけりとぞ

69038
6AP78